

んこれが完全なものであるとは思っていないので、もし今後またこの地域を研究する機会をよつたら、他の地域の比較の上から、地域性というものを考察しなおしてみたいと思う。

## 榛名火山東南麓の地形と土地利用

### 類地 蓉子

調査地域の地形は主として、第四紀の火山活動によつて形成された榛名火山の東南部の火山体斜面である。しかしこの火山体斜面は形成時期のちがひから新、旧二つの地形地域に区分される。各々の地域の主要地形面が旧期火山体浸蝕谷壁急斜面、新期火山体緩斜面となつていていることからわかる様に新期火山体に比し旧期火山体の起伏量が大きいこと、旧期火山体には関東ローム層中の上部ローム層（立川ロームに対比）、中部ローム層（武蔵野ロームに対比）が堆積しているのに対し、新期火山体には上部ローム層しかのつていないことなど、それらの明析程度の差異、火山灰層の被覆関係は明らかに二地域の火山景面形成の時期の相違を確認させ、地形区分の根拠となつていている。それぞれの火山景面は両火山体緩斜面においてその存続を許しているが、それらの構成物質は時代は異なるにしてもいずれも榛名火山起源の泥流及び浮石流等の火山性堆積物であり、表層を薄くローム層が被覆しているのである。

これらの火山体斜面の他に、より下流部には台地地形地域と、以上3つの地形地域の境となつていている、烏川、白川、井野川等の低地、

地形、地域が存在する。これらの地形は水成堆積物よりなる。台地面は台地地形地域の主要な面であるが、基盤が火山性堆積物と思われる特殊な台地である。表層部に砂質の水成堆積物をのせている。又微高地面をその中に分布させ、その部分では上部ローム層の二次堆積物が主として堆積している。低地地形地域で特色ある地形は、白川の下流部にある現堆積性扇状地面と井野川の浸蝕谷床面である。白川の上流部は火山体斜面と河床との比高が10%以上もの浸蝕谷を刻んでいるのに対し下流部ではむしろ河床面の方が周囲よりも高く存つていている。又井野川はかつての自身の堆積物をあらたに下刻して4~5mの浸蝕谷壁を形成している。

土地利用はおよそ100mから650mまでの山麓部は耕地、650mから1400mまでの山頂部は森林が卓越している。耕地としての土地利用は畑地、桑園が約5%を占め、主として新、旧火山体緩斜面に分布している。

水田はおよそ25%である。台地面、谷床面に分布している。畑地、桑園の卓越は明らかにこの地域の農業的土地利用の自然的制約の強さを示している。日本農業は水稲作が中心であるのににもかかわらず、水利の悪さ、かなりの傾斜は水田をわずかな面積に限っているのである。

農業は水稲及び陸稲、大小麦、甘藷、馬鈴薯等の畑作物が自給作物として基幹作物となり、かつそれらがある程度商品化している点、日本各地の古い畑作卓越地域と同様であり、特に関東周辺の畑作地帯としての典型的特色を示すと云えよう。これらの自給兼商品作物に対して純粋な現金収入源として養蚕が行われている。幕末の開港による生糸の輸出で群馬県一帯著しく養蚕が发展したが、この地域と同様の発展をした。第二次大戦によつて打撃を受けたものの今日も養蚕の農家の経営上占める位置は最も大きいと思われる。

かつ県内でも養蚕の盛んな地域に属している。春から夏にかけて3回にわたる蚕育成時期は、田植え、畑作物（主として麦）の収穫及び播種の時期と重なり年間の労働のピークを形成している。特に5月は著しい。この事は賃金労働量によつても示されるが、家族、特に婦女子の養蚕に対する役割の大きさによつても窺い知る事ができる。

現在労働人口の減少はこの地域においても争えない事実であるが、この益省な養蚕の技術が導入されている。

一方養蚕による労働の集中は畑作物に対して制約を与えていると思われる。すなわち古くから栽培されて来り穀類が依然として主要な地位を占め、昼夜的商品作物である。蔬菜花卉がわずかな自給程度にとどまっているのも一つにこれが原因していると思われるのである。

この地域は冬の積雪が少なく水田農作が卓越している。麦が栽培されている。これは西関東の農業の特色をあらわしている。古くから開発された農業地域で経営規模が狭小であること、冬に余剰労働力があること、水利非水に恵まれた水田があることがこの二毛作を立地ならしめていると考えられる。

